会員研究

信玄正室三条夫人の出自と哀れな最期

高野賢彦

武田信玄の正室三条夫人は「京都の公家三条公頼の女」であるという通説を疑問視している人はほとんどいない。しかし私は疑義を抱いており、夫人の菩提寺円光院の武田住職のお話を聞き、やはり「そうだったのか」という思いで調査を始めた。

『甲陽軍鑑』を見ると、「太郎（晴信＝信玄）は今川義元の肝煎りで十六歳の三月吉日に元服して信濃守大膳太夫晴信と称し、かたじけなくも禁中より特使として転法輪三条殿が下向。すなわち勅命によって三条殿姫君を晴信へとて、その年の七月に御輿入れした」という趣旨のことが書かれている。

そして山科言継の『歴代土代』に「太郎が天文五年（一五三六）正月十七日に従五位下に叙せられたこと、信虎も『実隆公記』に同年正月に四位に叙せられんことを望んでいた」と書かれ、いずれも箔付けをしていることが分った。これらの記録から晴信と三条殿姫君の婚儀は三月に執り行われることになっていた。しかし今川氏輝と彦五郎が同日に死去するという怪事件が突発したため延期され、七月に執り行われることになった。

問題はむしろ姫君がはたして七清華家の閑院嫡流の三条家の姫であったかどうか、ということである。三条公頼の子らのことは『系図纂要』『宮廷公家系図集覧』に書かれており、「公頼に三人の女があり、次女が信玄へ嫁いだ」とある。香り草のように気高い姫君が草深い東国の甲斐へ嫁いだことは大いなる驚きである。その経緯はどういうことであったか。万が一、信玄夫人が三条公頼の女でないとすれば実父は誰であろうか。

一　寿桂尼と武田信虎

信虎は今川氏親の未亡人寿桂尼と和睦したことを喜んだが、氏輝が成長すると両国の関係はたちまち破綻して天文四年（一五三五）八月には戦火を交えるに至った。すると氏輝と同盟関係にあった小田原の北条氏綱が富士東麓から甲斐の山中湖方面へ侵入、これに抵抗した信虎の小山田勢や実弟信友を打ち破った。

この事態を憂慮した信虎は長年敵対関係にあった信州の諏訪頼満に請うて同年九月に国境の堺川の川端で和を結んだ。駿府の寿桂尼はこのことを知ると、これを一大事と思い、高僧太原雪斎と相談した。雪斎は北条氏康より武田信虎に親近感を抱いていたと見え、信虎と和睦する決意を披歴した。そのとき名家好みの信虎は寿桂尼に太郎の後添えを探してほしいとお願いをした。それは太郎が二年前に河越城主上杉朝興の女を妻に迎えたものの、妻は出産することができず懐胎したまま死去してしまい、今は独身でいたからである。公家出身の寿桂尼は信虎の要請を聞くと、武田太郎の花嫁探しに奔走した。

二　後奈良天皇とその周辺

寿桂尼が信虎の意向を受け入れて間もなく、太郎の縁談は畏れ多くも天皇家の周辺で話題になった。それは後奈良天皇の生母が寿桂尼の実家中御門家の本家ともいうべき勧修寺教秀の女藤子であったからだ。

ここで天皇の配偶者を見てみよう。皇妃萬里小路栄子（正親町天皇の生母），広橋国子（父は日野

家流の広橋兼秀、母は勧修寺政顕の女。女官典侍として天皇に仕え、姫宮聖秀が尼門跡の曇華院を相続）のほか女官水無瀬具子（実父の水無瀬季兼は三条公冬の二男）などがいた。具子は親王＝のちの後奈良天皇の子を身ごもると、後宮を下がって広橋守光の養女となった。そして出産後は勅によって掌侍から典侍へ昇格。ただ出産前に広橋家の養女に出されたため子は天皇の系図には載せられていない。

また天皇の子らを見ると、主な子は『本朝皇胤紹運録』などによると、覚恕（天台座主）、石山合戦を終息へ導いた正親町天皇（第百六代天皇）がいる。

三　水無瀬具子と姫宮

水無瀬具子が公家広橋守光の養女になったのは天皇と守光の縁が深かく、仲良しだったからである。水無瀬家は藤原北家流の家柄で大阪府の島本町に居を構えていた。そこには後鳥羽上皇の離宮があり、また後鳥羽、土御門、順徳天皇を祭神とする水無瀬神宮があって往時は連歌会が盛んに行われていた。

具子は天皇の子を広橋家で出産したが、『お湯殿の上の日記』によれば、具子の子は姫宮だったのか、『お湯殿の上の日記』に尼門跡（おそらく曇華院）へ入ったと思われる姫宮のことが書かれている。

四　姫宮と武田太郎の婚約

具子の姫宮誕生から十一年後の天文四年（一五三五）八月、後奈良天皇の『天聴集』に天皇が三条宰相中将、すなわち三条公頼の父実香のことが書かれている。公頼は『公卿補任』によれば、天文三年寿一月に大内義隆の周防山口に所有している庄園へ下向しており、帰京したのは同五年六月であった。

また『天聴集』には同年八月十日に水無瀬英兼（具子の兄）が天皇に面会しており、『お湯殿の上の日記』には英兼が十一日に天皇にお礼を申し述べ、盃を賜わったと書かれている。この一連の動きは姫宮の身の上に関することと思われ、天皇が英兼に姫宮は三条家の養女にすると告げたのではなかろうか。天皇は姫宮が帯締めの衣装を身につける機会をとらえて新たな道を歩ませたいと思い、三条家の養女にしたものと思われる。

寿桂尼は駿府でこの成り行きを耳にすると、姫宮こそが武田太郎の後添えにもっともふさわしいと思ったのであろう。また『天聴集』によれば、天文四年十二月三日に女中衆が酔いつぶれるほど喜んでいたが、それはおそらく姫宮の縁談のことを聞いたからであろう。翌四日には武田家と親しい今出川大納言公彦がお喜びを申し上げて三種二荷を進上し、三条実香も三色三荷を進上している。

『お湯殿の上の日記』によれば、姫宮は御所では「はな、花」などと呼ばれていた。それは水無瀬季兼や英兼が御所へ参上するとき花を持参したこと、あるいは姫宮が入ったと思われる曇華院の「華」に由来するのであろう。また『お湯殿の上の日記』には天文五年七月のこととして姫宮送別のことが書かれている。たとえば九日には御めでた事の御さか月（杯）まいる。七こん（献）まいる。うたいまい（謡い舞い）にて御ひしひしと（床を踏み鳴らす様か）・・、いく久しくもめでたしめでたし・・。

さらに姫宮は九日に父帝をお訪ねになり、これまで賜わった数々のお礼を申し上げ、永久のお暇を賜わるご挨拶をしたものと思われる。姫宮の干支「甲申」は大永四年（一五二四）に当たり、太郎晴信より三歳年下である。

姫宮の輿が駿府を経て富士山の西側を通って右左口（うばぐち）峠から甲府の武田館へ到着すると、その日のうちに公家風の婚儀が執り行われた。『お湯殿の上の日記』によれば、天皇が婚儀の見届け役として甲府へ遣わした藪（やぶ）中将が九月二十三日に三色一荷を手土産として帰京し、婚儀の一部始終を報告している。

五　晴信と側室諏訪御寮人の婚儀

天文七年（一五三八）、晴信と三条夫人の間に長男義信が生まれた。夫妻の間は至って円満であったが、問題は晴信とその父信虎の関係にあった。信虎が晴信を気に入らず、性素直な次郎信繁を愛していたのであった。晴信は古今の兵書や文芸書を読破して生意気に育った。そのため事あるごとに無学の信虎に邪険に扱われ、駿府の今川家へ追いやられかねない状態にあったのだ。

ところが天文十年（一五四一）五月、信虎は滋野一族（信州東御

市）を討って意気揚々と引き揚げてきたが、調子に乗りすぎて油断したのであろうか、晴信によって六月に駿府の女婿今川義元のもとへ追放されてしまった。晴信はそれから一年ほど後に兵馬を動かし、事もあろうに義理の妹お菊が嫁いでいる諏訪頼重を攻め破り、頼重を甲府の東光寺で謀殺した。年下の晴信に手玉に取られた義兄頼重の恨みは深く、切腹したとき三刀目で胸の肉塊をくりぬいて後ろへ倒れた。頼重の辞世には「おのずから枯れ果てにけり草の葉の主あらばこそ又も結ばめ」と遺されている。

また諏訪大社の大祝（おおはふり）（神主）に就いていた実弟頼隆と頼重夫人お菊（信虎の女）も甲府で死去した。さらにいずれは諏訪を背負って立つ頼重の子寅王（とらおう）ものちに晴信を恨んで駿河へ逃亡した途次殺されてしまった。

晴信は諏訪家を滅ぼし、十一歳の頼重の女御寮人（先妻の子）を側室にするため甲府へ連れて来て、あたかも正室を迎えるかのごとき婚儀を挙げた。それは天文十一年十二月のことであったが、晴信の侍大将らは殺した頼重の女との婚儀に猛反対した。後に武田家が滅亡する遠因はここにあったと見ても過言ではないのではないか。正室三条夫人にとって晴信と御寮人の盛儀は衝撃であったが、さらなる衝撃は婚儀の当初は晴信を恨んでいた御寮人が男児四郎（のちの勝頼）を産んだことであった。

六　嫡子義信と側室の子勝頼

晴信は姉である今川義元夫人が死去すると、天文二十一年（一五五二）十一月に嫡子義信の夫人として義元の女を迎えた。ところが義元が三河の桶狭間で信長に討ち取られると、義信に今川領乗っ取り策をほのめかした。

義信と夫人はイトコ同士で仲むつまじく、父晴信の話に猛反発し、今川家を守るのは自分だと公言してはばからなかった。これを機に晴信と義信の関係は冷却化し、永禄四年（一五六一）九月の川中島戦の時から父子の関係は決定的に悪化した。それは上杉謙信が晴信の妻女山へ侵入して来たとき、キツツキ作戦をもって謙信を追い出そうとした晴信に対して義信が主だった部将らとともに猛反対したためである。

加えて翌五年六月、側室の子四郎が遅ればせながら十七歳で元服し、勝頼を名乗って高遠城主となるに当たり、晴信が勝頼によき武士八人を付属させたからだ。駿河派の義信に対して晴信と勝頼はいまや信長派といえなくもない関係になっていたのである。晴信はそれ以来しきりに信長と通交するようになったが、東方の武田を警戒する信長に度々だまされるようになった。

七　三条夫人の最期

三条夫人は義信がいずれは甲斐の当主になるものと期待し、それを生き甲斐として周囲の人々に仏法を説いていた。思えば譜代衆八十騎を率いて人望と勇気に優れていた義信は今川家を滅ぼそうとしている晴信に対して強い不信感を抱いていた。

謀略心にたけていた晴信が永禄八年にかねてから不穏な関係にあった飫富兵部（おぶひょうぶ）（義信指南役で武田第一の侍大将）を反逆罪で切腹させ、義信も同罪で翌年東光寺の座敷牢へ押し込められた。これを知った織田信長は晴信の跡目は勝頼とにらみ、永禄八年（一五六五）に勝頼に自分の姪（養女）を嫁がせることに成功した。

信長と言えば岳父義元を討ち取った大敵、義信は座敷牢で切歯扼腕したが、晴信は永禄十年（一五六七）十月に熟慮に熟慮を重ねた上で義信を抹殺した。勝頼はすでに諏訪家を再興して諏訪勝頼を名乗っていたので晴信には武田家を継ぐ跡目がいなくなった。

ところが義信殺害の翌月、勝頼夫人が男児を産んだ。大喜びの晴信は近臣土屋右衛門尉昌次を高遠へ遣わし、太刀などを与えると同時に赤子に「信勝」と命名して自分の養子にした。諏訪家の子を横取りして武田家の跡目に迎えたのだ。

後奈良天皇の血筋を引く三条姫は仏法のお家である転法輪三条家の養女となって晴信に嫁ぎ、正義感の強い義信の長命を祈りながら日々西方の甲斐駒ヶ岳や鳳凰山に向かって手を合わせていた。しかし、誰あろうことか、義信は夫の晴信に殺されてしまった。

夫人は晴信に嫁いで三十五年、その間に晴信と楽しく語らったのは義信出産前後のわずかな期間のみ、その周囲には信虎と晴信の対

立からあまりにも哀しいことが多すぎた。夫人の逃げ場は仏法のみとなり、日々、人々を集めて説法をし、夜は松風の音を聞き、そしてツタカズラにかかっている月影を眺めながめていた。

永禄十三年（一五七〇）に入ると、夫人は心身が衰えて病床に伏すようになった。京の都から随身してきた公家侍の八重森因幡守や女中衆が夫人の容態を京へ伝えると、やんごとない人々が天皇皇后にお暇乞いをして下向してきた。

中院通勝の『継芥記』によれば、四月十二日には武田家と親しい今出川公彦が御所を訪ねて甲斐下向のお暇乞いをすると、天皇皇后は公彦を御三の間へ案内して御酒を給わった。また『お湯殿の上の日記』によれば、晴信が深く帰依していた妙心寺長老が四月十九日に天皇皇后にお暇乞いをすると白銀一枚ずつを賜わり、皇后からはとくに夫人が生き長らえるようにと祈りを込めた長春（庚申バラ）と花橘を結んだ枝を賜わった。

さらに山科言継の『言継卿記』によれば、三条家の分家である正親町三条公兄も十九日に御所を訪ねて明後日に甲斐へ下向する挨拶をしている。三人の下向はいずれも晴信夫人を見舞うためであった。晴信は今出川・正親町三条の両卿から天皇の兄覚恕が天台座主に就任することを聞くと、覚恕に就任祝いとして「毛松筆の猿図一幅」（現在は国宝）を献上した。

晴信は生まれたばかりの赤子信勝を養子にしたが、赤子では合戦ができないことを思い知り、将軍足利義昭に今川領の駿河焼津の高草山で御領所一万疋を進上し、勝頼に「官位と将軍の御一字」を賜わりたいと書状を送った。勝頼の諏訪姓を武田姓に改めて勝頼に武田家にふさわしい名を付けて跡目にしたかったのだ。しかし信長からがんじがらめにされていた将軍からはなんの返事もなかった。

夫人が力尽きて身まかられたのは初秋の風が吹き始めた七月二十八日であった。葬儀は説三和尚の法語にはじまり、快川和尚が大導師となって法名を授けた。そこには夫人が幼いときから御所で「はな、花」と呼ばれて白梅の花を特に好んでいたため花の古字が書き込まれている。

『お湯殿の上の日記』によれば、八月十三日に権典侍（こんすけ）が天皇に火急のことを申し上げると、天皇はすでに御心得のよし仰せられた。夫人は遥かなる東国へ嫁ぎ、肉親といえば盲目の二男信親と穴山梅雪へ嫁いだ次女（見性院）が存命しているのみ、三男信之は幼くして死亡、長女黄梅院は小田原の北条氏政へ嫁いだが、晴信が駿河へ侵攻したとき怒った氏康が甲府へ追い返した。子四人を残したまま憔悴して帰ってきた黄梅院は、間もなく狂乱状態となって死去した。子らにも恵まれなかった夫人の生涯を想うと、痛惜の念に堪えない。

主な参考文献

後奈良天皇宸記『天聴集』『お湯殿の上の日記』『実隆日記』『継芥記』
『公家諸家系図』『言継卿記』『宮廷公家系図収覧』『細川系図』『佐々木系図』『天皇皇族歴史伝説大辞典』『戦国大名閨閥事典』『天皇系図』『系図纂要』『信玄の妻』『顕如上人日記』『女春尼の生涯』『歴代天皇皇后総覧』。

以上